

深読み聖書のおもしろさ

奨励	三木 メイ [みき・めい]
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター助教
研究テーマ	キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

兄弟たち、あなたがたにはつきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。

あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの方よりもユダヤ教に徹しようとしていました。しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。

(ガラテヤの信徒への手紙 1章11-17節)

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される所だった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

(ルカによる福音書 7章11-17節)

「深読み」と「浅読み」

春学期の講義期間も、あと3週間足らずとなりました。学生の皆さんは、今学期それぞれに充実した学びができたでしょうか。しっかりと復習して、試験に備えて頑張っていたかと思えます。

さて、私は「キリスト教とは何か1」という科目を3クラス担当しておりまして、旧約聖書のさまざまな物語や言葉に込められたメッセージを読み解きながら、キリスト教信仰のルーツを探求していくための講義をしています。受講生の皆さんにはいつも授業が終わるごとにコメントを記述して提出してもらっていますが、春学期の後半に入ってから、こんなコメントが多くなってきました。例えば、「最近、聖書に対するイメージがどんどん変わってきています。旧約聖書は不思議な話でできていると思っていたけれど、今の世界にもひびく記述があることを知り、考えを改めました」。「私は聖書のことを全く知らなかったのですが、毎週聖書の物語を聞いたり、本を読んだりしていると、聖書に出てくる物語は面白くて、その上何か深い意味を持っていて、考えさせられるなあと思います」。「私は最近、他の童話とか物語を読んだ時にも、キリスト教的要素が込められていることに気がつき始めました」等々。

私は、こんなコメントを受け取ると、正直とても嬉しいです。授業を一生懸命やってきてよかったな、と思わせる瞬間です。こういうふうに聖書の深い意味を読み取ることができた学生たちがいる、その一方で、相変わらず聖書を表面的に浅く読むことしかできない人も、実は結構たくさんいることも知っています。「深読み聖書の面白さ」の反対は、「浅読み聖書のつまらなさ」です。

同じように授業を受けていても、そういう違いは自然と出てくるのです。それはおそらく私の聖書の解釈などを聞きながら、受講生自身が自分の想像力を働かせて考えているか、いないかの違いだろうと思います。聖書という書物は、今から3000年から2000年前から文書伝承されてきたものですから、そのまま表面的に読んただけでは分からないことだらけでつまらない、と感じても無理ないと思います。けれど、そこには古代から語り伝えられてきた非常に重要なメッセージが隠されているのですから、ぜひ自分の頭で考えながらそのメッセージを読み取ることができるようになって欲しいと思います。深い意味を感じられるようになって欲しいと願っています。

死と再生の二つの物語

さて、今日あげる聖書は、旧約1箇所、新約2箇所です。チャペル・アワーでの奨励の場合は、取りあげる聖書箇所は1箇所のことが多いです。しかし、教会の礼拝では（どの教派かによっても違いますが）、教会暦によって聖書日課というのが決められていて、説教の前に、その日の旧約聖書、使徒書、福音書、の3箇所を読むことが多いです。これは聖書全体（旧約・新約）にちりばめられたメッセージの深い意味を読み取るために3箇所あげられているのです。つまり、教会では、学校での授業とは異なる方法で、聖書に示されている深い意味を想起することを大切に礼拝をしているのです。これは「深読み聖書」のいわば中級編と言ってもいいかもしれません。今日の聖書のお話は、現代に生きる私たちにとって、最も理解しにくい、死と再生の物語を取りあげます。

「イエスは、『若者よ、あなたに言う。起きなさい』と言われた。」（ルカによる福音書7章14節より）このルカによる福音書の箇所は、一度死んだ若者がイエスによって生き返るといふ奇跡物語です。そして旧約聖書の列王記上17章17-24節には、預言者エリヤによる死と再生の物語があります。この二つはよく似ています。どちらも死んで生き返ったのは、やもめの息子です。「やもめ」というのは、夫を失った女性、未亡人のことですから、当時においては大変悲惨な境遇で暮らしていたはずで、そして、そのために「神から見捨てられた民」を象徴する存在でもありました。

この旧約聖書の列王記と新約聖書のルカによる福音書の二つの物語を比べてみると、少しずつ違うところがあります。列王記では、エリヤと母親との関わりについて語られています。彼女は飢饉によって食料がわずしか残っていなかったにもかかわらず、エリヤの言葉を信じて、彼に食料を差し出した。それだけ、深い信仰をもっていた女性です。そして息子が重い病気になるまで、息を引き取ってしまった。夫だけでなく息子までも失ってしまった、その女性の深い悲しみに満ちた訴えに答えて、エリヤは、子どもの上に三度自分のからだを重ねて、神に祈ります。こうして、息子を生き返らせ、母親に渡します。「見なさい。あなたの息子は生きています」（列王記上17章23節より）

ルカによる福音書を編集した人は、この旧約のエリヤの物語を知っていたはず。それでこれを用いて、イエスも神から遣わされた預言者であり、しかも預言者エリヤよりも偉大な「大預言者」であることを人びとに伝えようとしたのではないかと考えられています。ルカによる福音書では、イエスは悲しむ母親に「もう泣かなくともよい」と告げて、棺に手を触れ、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言う。すると、死人が起き上がったものを言い始めた、そして母親にお返しになった、と記されています。エリヤが全身を使ったのに比べ、イエスは手を触れただけで息子が生き返った、とされています。

「死と再生」

一使徒パウロの場合

死と再生の物語は、2000年前には、イエスこそ神の子、救い主だ、というメッセージを人びとに知らせるために、ふさわしい話だったのかもしれませんが。しかし、このような物語を今そのまま語ってみても、現代人には単なるおとぎ話でしかありません。神信仰をもたない人が、最初に聖書につまずくのがこのような奇跡物語です。実際にそんなことはあり得ない、そんな嘘は信じないという気持ちになるのは当然のことです。しかし、そこにどんなメッセージが隠されているのか、考えてみましょう。

人の生涯の長い道のりを振り返ってみると、肉体的な死とは異なる意味での「死と再生」が何度も繰り返されて、今があることに気づかされます。ある出来事をきっかけとして、それまでの自分から脱皮して、新たな自分に生まれ変わる、そういう道をいつのまにか歩んでいた、ということがあります。

ガラテヤの信徒への手紙を書いた使徒パウロは、もともとはユダヤ教徒であってキリスト教徒を迫害してきた人でした。それが、復活のキリストと出会うと、それまでの迫害者としての自分に死んで、全く逆にキリストの福音を伝える者として再生し、新たな人生を歩んだのです。パウロ自身が手紙に書いています。「わたしは、ユダヤ教徒として、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていた。しかし神が、御子イエス・キリストをわたしに示して下さって、福音を異邦人に告げ知らせるようになされたとき、わたしは血肉（つまり家族）に相談しなかった」。パウロのこのときの年齢はよく分かりませんが、まだ若かったのではないかと思います。彼の劇的な変化を、両親はどのように思ったのでしょうか。聖書には全然書かれていないのですが、想像してみてください。パウロは、ユダヤ教の高名な律法学者の下で学んでいた、そしてローマの市民権ももっていた、ユダヤ教徒のなかでもいわばエリート階層の家柄だったはずで、彼の周りの人びとも親たちも、彼の将来に大いに期待をしていたでしょう。ところが、あれほど迫害してきたキリスト教徒の仲間入りをしただけでなく、その福音を自ら人びとに宣べ伝える活動を始めてしまった。もちろん家族に何の相談もなくです。パウロの親からすれば、大切な息子を失ってしまったような出来事だったのではないのでしょうか。それは深い失望と悲しみを引き起こしたでしょう。それでもパウロは、神からの「召命」、神の呼び出しに従って、迫害者の自分に死んで、福音宣教師としての使命を全うする新たな再生の道を歩んだのです。

イエスと家族の場合

イエスご自身は、どうだったでしょうか。バプテスマのヨハネから洗礼を受ける前のことは聖書には書いていないのですが、おそらく母マリアの長男として、一家の経済を支える仕事をし、兄弟姉妹を養っていたのかもしれませんが。それがしばらく家族の前からいなくなった後に、「神の子、メシア」と言われるような活動をするようになっていた。昔の「息子イ

エス」ではなかったのです。

母マリアが兄弟と一緒に、息子のイエスを訪ねていったときのことが聖書に書かれています。そのときイエスは「私の母、私の兄弟とは誰か。神の御心を行う人が私の兄弟、また母である」という非常に冷たい言葉を発しています。マリアの息子であり長男であった自分に死んで、神から派遣された「救い主」としてその使命を全うする。イエスの死と再生は、そこにまず起こっていたと言えるのではないのでしょうか。もちろん家族は全く理解できなかったでしょう。ショックだったと思います。しかし、イエスの死後、母マリアと兄弟たちが弟子たちと共に熱心に祈っていた、という記述が使徒言行録にあります。ですから、この家族たちは、息子であり長男であったイエスが失われたことに戸惑い、悩んだ時期があったはずですが、少しずつ神の子、救い主としての使命を果たそうとしたイエスを理解するようになって、彼ら自身が新たに生まれ変わり、イエス・キリストを信じて、新しい命を生きることになったのではないのでしょうか。

新島が自分の道を

見いだした時

若者は、悩んでいます。今も昔も、自分の生きるべき道を探して葛藤しています。特に、親たちの期待と失望に戸惑いながら、どうしたらいいのだろうか悩んでいます。皆さんはどうでしょうか。

同志社の創立者「新島襄」は、まさにそのような青年時代に聖書に出会っています。彼の父は、安中藩の藩士で「祐筆」という今で言う書記のような仕事をしていて、息子にその仕事を継いでほしいと期待していたようです。新島がまだ20歳ぐらいのころに、彼は友人から借りた聖書の言葉を抜粋した小さな冊子を読んで、「神」を知ったと言います。「私を造ったのは誰か。父か、母か、いや天の父なのだ」。そして、両親が悲しむだろうと思って家出をためらっていたのですが、こう考えます。「私は両親から生まれ育てられたが、本当は私は天の父のものである。それゆえ私は天の父の道を進まなくてはならない」。そして、国外脱出のための船を探し始めるのです。まだキリシタン禁制の鎖国時代の話です。許されるはずのないことで、見つければ殺されていたでしょう。しかし、多くの人の助けを受けて、新島は10年後に牧師として日本に戻ってきました。両親からすれば、死んでも同然と思っていた息子が帰ってきて、さぞ喜んだことだろうと思います。新島は、侍だった自分に死んで、自由な精神とキリスト教信仰をもつ牧師として新たに再生したのです。

人の生涯のなかに

起こる「死と再生」

人間の生涯においては、どんな人にも小さな死と再生の出来事が起こります。たとえ劇的な変貌を遂げることがなかったとしても、また変わりたいと願ったわけでもなく、それは起こってきます。ときには、それは家族にとって、また本人にとっても深い苦しみ、悲しみ、悩みを伴う出来事かもしれません。しかし、後から思い返してみると、神の導きによって、豊かに成長するためだったと気づかされることもあるのではないのでしょうか。

聖書には、神からの呼び出しに応答して自分の道を歩み始めた人物の物語がたくさんあります。旧約聖書では、アブラハム、モーセ、エリヤなどの預言者や、ダビデ、ソロモンなどのイスラエルの王たち。新約聖書では、イエスや弟子たち、使徒パウロなどです。

彼らは神の導きに従って、神によって示された真理を探求し、この世でなすべき使命を果たそうとします。そういうなかで、自分自身の生きる道、真実の生きる意味を見いだそうとする者たちのうえに起こってくる死と再生があります。それに伴う苦しみの意味を、私たちはすぐには理解できないのです。しかし、深い苦しみ、悲しみのときにこそ、神は共にいてくださいます。そのことを聖書はさまざまな物語を通して、語り伝えてくれています。

「若者よ、あなたに言う。

起きなさい」

今、大学で学んでいる皆さんの多くは、自分の道を探し求める苦しさを一番感じるときを生きているのではないのでしょうか。

主イエス・キリストが、真実に私たちを眠りから目覚めさせてくださる方であり、生き生きとした新たな命を与えてくださる方であることを、聖書を通して皆さんと多くの若い人たちが知ることができるように願っています。主なる神が私たちと共にいて守り導き、真実に目覚めさせてくださるように、そして、一人ひとりが生き生きと自分の道を見いだしていけるように、祈り求めていきましょう。